

学生相談カウンセラーと教職員との連携・協働関係構築の工夫

徳田 智代

要約

本研究の目的は、学生相談カウンセラーが教職員との連携・協働関係を構築する際に、どのような関わり方や工夫をしているか、明らかにすることであった。

学生相談専任カウンセラー15名を対象に半構造化面接を行い、徳田(2006)が示した連携・協働関係構築のためのカウンセラーの関わりである「教わる姿勢」、「ニーズの把握」、「情報の共有」、「言葉の工夫」、「細やかな報告」、「小さなことからコツコツと」、「独りよがりにならない工夫」、「立場を活かす」(以下「8つのポイント」と記す)をカテゴリーとして、分析を行った。

その結果、教職員との連携・協働関係を構築する際、多くのカウンセラーが8つのポイントを活用していることが明らかになった。さらに、「相手を知る」、「組織を知る」、「相手を尊重する」が見出され、これらは特に組織に入る段階で留意すべき重要な点だと考えられた。

キーワード：学生相談カウンセラー、協働、連携

平成29年9月に施行された公認心理師法には、「公認心理師は業務を行うに当たって、心理に関する支援を要する者に対し、保健医療、福祉、教育等が密接な連携の下で総合的かつ適切に提供されるよう、関係者等との連携を保つ」ことが義務等として示されている(公認心理師法第42条)。また、大学院の必修科目「心理実践実習」には、「心理に関する支援を要する者へのチームアプローチ」や「多職種連携及び地域連携」の修得が含まれている(文部科学省・厚生労働省, 2017)。下山(2017)は「保健医療領域を始めとするメンタルヘルス関連の諸領域において、心理職を含めた多職種協働チームの活動が強く求められるようになった」ことを指摘しており、鶴(2017)は「現在、チーム医療は普通となり、チーム学校が強調されるなか、連携・協働としてのコミュニケーション力は公認心理師にとって必須といえる」と述べている。

また鶴(2017)は「支援が必要な人への援助には、担当援助者による援助のみではなく、他の専門家と連携しての援助が必要なことが少なくない」ことを指摘

しているが、これは学生相談の実践においても例外ではない。多様な学生を抱えるようになった大学において、学生相談カウンセラーと教職員との連携・協働は必要不可欠であり、連携・協働の重要性がいわれて久しい(例えば、日本学生支援機構, 2007; 文部科学省, 2011; 2013; 文部省, 2000; 齋藤, 2015; 齋藤・道又, 2003)。

しかし、1176校の大学・短期大学等を対象にした日本学生支援機構の調査(2017)によると、「学生支援を全学で取り組むための体制・スタッフを充実・強化したい」に「強くそう思う」「そう思う」と回答した大学は8割を超えており、克服すべき課題として「学生支援のための教職員の連携強化」を挙げている大学は未だ多い。また、宇留田(2004)は「協働が簡単に成立するものでないことは、このテーマに取り組む者の共通認識になっている」と述べており、10年以上経った現在もこの認識に大きな違いはないと思われる。丹治・渡部・藤田・川瀬・大場・野田(2004)は連携の困難性と研究の不十分さを指摘し、連携を阻む要因と

して、「言葉の壁」、「縄張り意識と意地」、「価値観・考え方の違い」、「採算性」を挙げている。他にも連携・協働の難しさや不十分さに言及した研究や論考は数多くみられる(例えば、中釜・高田・齋藤, 2008; 坂本, 2012; 下山, 2017; 手塚, 2004)。

教育コミュニティにおける連携・協働研究を概観した齋藤(2015)は、「研究を推進する際には、まずはある特定の関係者との直接的な連携に焦点があてられることになる」ことに理解を示しながらも、「より望ましい援助を考慮するためには、さらに歩を進めて、学生を取り巻く対人ネットワークの全体を視野に入れること」の重要性を指摘している。そのうえで、「『連携・協働』を行うに際しての基本姿勢、カウンセラーの『スタイル』に係る考察がまだまだ十分でない現状」を指摘し、「経験を積んだ学生相談カウンセラーが『期間』と『段階』を踏んで学内外の関係者とともに築き上げた『連携・協働』のあり様を示していくことが必要」であると言う。

徳田(2006)は学生相談カウンセラーとしての臨床実践をもとに、連携・協働関係を構築するためのカウンセラーの関わりとして、「教わる姿勢」、「ニーズの把握」、「情報の共有」、「言葉の工夫」、「細やかな報告」、「小さなことからコツコツと」、「独りよがりにならない工夫」、「立場を活かす」の8つの工夫・ポイントを見出した(以下、「8つのポイント」と記す)。さらに、これらのカウンセラーの関わりが、連携・協働関係の構築に役立つか確認するために、学生相談室と緊密な繋がりがある保健管理室との連携・協働に焦点を当て、実践的フィールドワークを行った(徳田・牛尾, 2015)。その結果、学生相談カウンセラーおよび保健師の両方の視点から、徳田(2006)の8つのポイントが連携・協働関係の構築に活かされていることが明らかになった。

しかし、これらの研究はいずれも筆者の実践による一事例研究である。そこで本研究では、学生相談カウンセラーが教職員との連携・協働関係を構築するために、どのような関わり方をしているか、8つのポイントを活用しているか、明らかにすることを目的とする。

方 法

データの収集と分析

調査協力者は、大学に勤務する学生相談専任カウンセラー15名(男性5名、女性10名、平均年齢42.5歳

($SD=7.5$)、学生相談歴2年～19年)であった。学生相談のネットワークや研修会で知り合ったカウンセラーに調査協力を依頼した。研究の主旨と研究内容について記載した資料を示し、メールで調査協力の依頼を行った。内諾を得ることができた者には、指定された場所に向いて、文書を示しながら研究の主旨や倫理的配慮について改めて説明を行い、文書で同意を得た。

まず調査用紙への記入を求め、90～120分の半構造化面接を行った。「日頃の学生相談の中での連携・協働についてお聞きします」と教示し、あらかじめ用意した質問への回答を求めた。具体的には、連携・協働の状況、連携・協働を促進あるいは阻害する要因、連携・協働を行う際の工夫や留意点について尋ねた。また、連携・協働を行った中で印象に残る成功例や失敗例について記述を求めた。さらに、連携・協働がその後の学生支援活動にどのような影響を及ぼしたかについても確認した。話の内容を深めるために、必要に応じて質問し、詳細な説明を求めた。

調査時期は、2013年3月～6月および2017年4月～11月であった。調査は調査協力者の指定する場所で行い、調査協力者の勤務する学生相談室の一角および筆者の研究室であった。

面接内容はICレコーダーにより録音し、匿名性を保持して作成した逐語録を分析対象とした。記録単位を文として、コーディングを行った。そのうえで、8つのポイントに合致する内容を抽出した。いずれにも合致しないものについては、概念を抽出し、ネーミングを行った。分析は3名(筆者、臨床経験5年の臨床心理士2名)で行い、一致率は78%であった。

倫理的配慮

調査協力者に対し、本研究の目的、概要、個人情報の取り扱い(個人情報が特定されないように記号化すること)、情報の取り扱い(逐語録の作成やデータの分析、管理を誰がどのように行うか等)、中止の自由、研究成果の発表等について、文書にて説明した。「調査協力承諾書」および「録音に関する承諾書」にサインをもらうことで同意を確認した。また、説明文書の中に、「インタビュー後に質問や意見があればいつでも受け付けること」を示し、筆者の連絡先を明記した。

調査用紙や逐語録において、調査協力者は全て記号で管理し、個人が特定されるような情報は削除するか記号化した。

結果と考察

まず、8つのポイントごとに、抽出された発言の例を示す。なお、「」は調査協力者の発言を示す。発言をそのまま抜き出す形で示すが、発言のみでは意味が分かりにくいなど不十分な部分については筆者が言葉を補い、()で示す。〈 〉のアルファベットは調査協力者記号を、数字は発言番号を示す。

(1) 教わる姿勢

「直属の上司、事務部長や課長に、もう一生懸命聞きました。」〈A30〉、「経歴が長い先生が多いので、先生のお考えを聞きながら（学生への対応を考えていった）。」〈C53〉、「こっち（カウンセラー）が困っているの、先生に相談させてください、助けていただきたいって言います。」〈E25〉、「こちらが専門家面というか、そういう態度で関わらないで、まずは相手（教職員）の意見を聞くように（心がけていた）。」〈H25〉などが抽出された。

教職員に対して「専門家面」で関わらず、時には困っていることや助けて欲しいことなどを率直に伝えたり、上司や教員の意見や考えを聞いたりしながら、学生への支援を進めていることが明らかになった。野坂（2008）も協働関係構築を望む場合には「力を貸して欲しいと素直に申し出ること」と述べており、花村（2015）は連携・協働の心得として、「互いに学び補完し合う姿勢が必要」と述べている。

(2) ニーズの把握

「その先生のニーズというか、その先生がどんなことで困っているかっていうのを見極めることかなと思いますね。」〈B39〉、「協働のポイントは、目標とニーズを共有することじゃないですかね。」〈B40〉、「『困ってます』と向こう（教職員）から持ち込まれると、何とか時間を空けて対応しようと（努める）。」〈D11〉などが抽出され、ニーズを把握することの重要性が示された。

学生相談に関する研究の中には、教職員のニーズから連携・協働を検討した研究が複数みられることから（例えば、高石、2010；鈴木・川島・長屋；2014）、ニーズの把握は連携・協働に欠かせないことがうかがえる。

(3) 情報の共有

「学生一人で（指導教員のところに）行くより、(カウ

ンセラーが)一緒に行って一緒に話す。」〈D69〉、「学生の状態をお伝えして、どのように助言をしていただけると助かるかということをお伝えする。」〈G3〉などが抽出された。学生と教員の話にカウンセラーが同席することによって情報の共有をスムーズに行えることや学生の様子をカウンセラーが教職員に説明しながら、情報の共有を行うこと等が語られた。

吉田（2017）は多職種連携において、情報の共有は「必要不可欠なスキル」であると同時に、「心理職にとって苦手分野の一つでもあると指摘される」と述べている。その背景には、これまでの臨床心理学では二者関係を重視したプライベート・プラクティスマodelが主流であったこと（高橋、2017）や守秘義務に関する不十分な理解があると考えられる。学生相談カウンセラーにとっても教職員との情報の共有が不可欠であることを十分に認識し、それぞれの臨床現場に応じた情報共有のあり方を模索していくことが求められる。

(4) 言葉の工夫

「専門的なことを日常的に想像できるようなかたちで伝えるというか…。」〈C43〉、「授業のこういった場面でこういうことで困りがちですとか、こういう助けを求めてくるのでお願いしますとか。」〈C44〉、「先生と本人（学生）の面談に一緒に行って、本人から話をしてもらって、僕が通訳して。」〈D65〉、「こちらでできることは、本人の状態について解説するっていうか。」〈G76〉、「『口調は乱暴だけど、同級生への対応の仕方が分かっていないので、そういう形になってしまうんです』とか（解説する）。」〈G77〉、「（自閉傾向がある学生が授業中に奇声を上げることに）先生が相談にこられて、『困ります』とおっしゃっていることに対して、こちらが『あれは嬉しいことがあった時の歓喜の声なんです』と話したら、先生の関わり方が変わってくる。」〈H34〉、「特に理系の先生は、『お伝えしたいことは三点です』とかがって、パパッと伝えないと…。」〈G46〉などが抽出された。

カウンセラーが学生の話や教職員に伝わるように「通訳」したり、教員の特徴に応じて伝え方を変えたり、様々な工夫を行っていることが明らかになった。また、言葉を工夫しながら学生のことを教職員に伝えることによって、学生への理解が深まり、関わり方が変化することがうかがわれた。高橋（2017）は、チームの中の個人がチームで効果的に働くために必要なことの一つとして、「心理の専門用語を使わないでチームの他のメンバーに伝わるような表現を心がけるこ

と」を挙げている。「言葉の工夫」に関しては、他にも「他の専門職にとってわかりやすいように話すこと」(吉川, 2017), 「平易な言葉で語ること」(花村, 2015)などの記述があり、わかりやすい平易な言葉で伝える工夫が連携・協働には重要であることが分かる。

(5) 細やかな報告

「学生がよくなったら、先生に必ずご報告を差し上げる。」<E25>, 「『こういうふうになりました, 先生ありがとうございます』と言うと, 次の学生(の相談や紹介)に繋がるので。」<E26>, 「会議で配慮すべき学生として名前が挙がる場合には, 担任の先生に連絡をして, 先に学生の情報を伝えることにしています。」<F16>, 「先生に何度かお会いしたり, その都度, 電話でやりとりしたり。」<C75>, 「休学明けや引きこもりの回復期に, 『(学生が大学に) 復帰しますのでよろしくお願ひします』と先生をお願いに上がる。」<D7>などが抽出された。多忙な中でも, 教員に細やかな報告を行うことが教職員との関係構築に役立つこと, また次の相談や学生の紹介に繋がること明らかになった。

(6) 小さなことからコツコツと

「私が心したのは, 走っていけば一分もかからない場所にいる職員からメールがきた時に, 走って返事をしに行くこと。」<A34>, 「(教職員との) インフォーマルな関わりっていうかね, その時間を非常に大事にしています。」<A35>, 「協働っていうけど, 学生のことだまっている先生たちの鬱憤を聞くのが最初なのかと…。」<G73>など, 小さな工夫や努力がなされており, 些細なことにも見える様々な努力が教職員との関係構築に活かされていることがうかがわれた。

花村(2015)もチームでの支援を円滑に行うために, 電話や電子カルテ上のやりとりで可能な連絡でもできるだけ直接対話することを心がけていることや, インフォーマルな会合でのざっくばらんな交流も大変有効と感じていることなどを述べている。

(7) 独りよがりにならない工夫

「保健室とは日々密にやっているのだから…保健師さんに相談して, どうしたらいいか聞いたり。」<E19>, 「学医の先生に相談して動くことが多いかな。」<F23>, 「学生が中心にいて, この学生のためにいろんな教職員スタッフが配置されているイメージで, いろんなネットワークを作って支援する。」<A15>などが抽出

された。

学生相談カウンセラーは独り職場であることが多いため, 保健師や学医, 教職員と連携・協働関係を構築することは非常に重要だと考えられる。実際, 他職種に相談しながら対応していることが多く語られた。「面接室にこもって職場から孤立する心理職」(高橋, 2017)や「心理職のやっていることはよく分からない」(吉川, 2017)とならないためにも, 独りよがりにならない様々な工夫が必要であろう。

(8) 立場を活かす

「准教授(カウンセラー)が(指導教員のところに)出て行くと, まあまあいい感じで, 事務の人が行くのとは, 大違い。」<D77>, 「学生にとってのスムーズな連携・協働が行われるためには, 実働班である職員に自分がシフトした方がいいことが分かってきた。」<A30>, 「アウトリーチの機会を活かすと, 担当する学生がどんな学部の雰囲気の中にいるかとか, いろんなことも掴みやすい。」<G56>などが抽出された。教員の立場であったことが功を奏したと語るカウンセラーもいれば, 職員の立場を活かすことでより効果的な連携・協働ができたと言者もいた。また, 心理の専門職という立場を活かして連携・協働し, それを学生理解や学生支援に繋げていることも明らかになった。

さらに, 8つのポイント以外にも, 次の工夫や留意点が抽出された。

(9) 相手を知る

「その先生が学生と一緒に困ってくれる先生か見極めます。」<B39>, 「教職員がどんな人か, どういう意識で働いているのか, そのあたりを判断するっていうのはありますね。」<H11>, 「先生がどんな人かとか, 会った時に査定しないとイケない。」<D42>, 「初めて会う先生だったりすると, どこまで理解のある先生か, そのあたりを確認しながら(関わる)。」<F26>, 「学生と話す中で, その先生にはよく相談しているとか分かったら, そういう先生はいい働きをしてくれるので。」<G31>, 「(教職員と) face to face でやりとりを実際にやっていると, 相手の人柄や相手がどんなところに価値観を持っているのかっていうことが分かるので, そこでもう選別してると思う。」<A33>, 「相手が伝えても伝わらない人の時はさっさと撤収しないと, 学生さんの利益にもならないし。」<G35>などの発言が数多く見られた。教職員がどんな人か, どの

ような意識で働いているのか、どこまで理解があるか、伝わる人かどうか、といった判断をすることが述べられており、「相手を知る」とした。

森田・野末・井村(2012)は「単に、名前と顔がわかるという関係ではなく、考え方や価値観、人となり分かる(後略)」ことを「顔の見える関係」として、日本の地域医療におけるその重要性を述べている。学生相談カウンセラーも「相手を知る」努力を重ねながら、教職員と「顔の見える関係」になることが重要であろう。

(10) 組織を知る

「大学組織の中にどんな役割の人がシステム化されているか、勉強しないといけないし、やっぱり間違えると、とんでもないことになる。」<A29>、「大学の風土というんですかね、大学の支援体制がどういうふうになっているのか、その判断も協働には大事だと思います。」<H11>、「結局、組織なので、情報伝達の筋を通すっていうんですかね、学部や学科によって違ったりするので、どういう筋にのせるかというのは組織としては大きいので、気をつけてやっています。」<G47>などの発言が見られた。大学組織や大学の支援体制を意識し、組織の一員としてどのような動きをすべきかを注意深く観察し、考えながら学生支援を行っていることがうかがわれ、「組織を知る」とした。

吉川(2009)は「援助組織の協働」において「臨床現場をアセスメントすること」の必要性を述べており、「それぞれの臨床現場の要請や限界、特性などに準じた対応ができることは、臨床家としては最低限の職能である」と考えると言う。カウンセラーが「組織を知る」努力は、吉川(2009)にも通ずると考える。

(11) 相手を尊重する

「カウンセラーの立場からしたら、(教職員に)もう少しこうしてほしいというのがあったとしても、その方の目線で支援しようとするのを尊重する。」<H25>、「こちらから何か押し付けることにならないように、最終的には、先生が選んだり、決めたりすることができるように(関わっている)。」<C53>、「(配慮学生への対応について)先生のやり方もありますから…。」<F21>、「大事なと思うのは、(教職員)一人一人を尊重すること。」<H54>、「相手(教職員)を立てながらというか、相手の力を発揮してもらいながら。」<H55>、「(学生の専門内容は分からないので)先生が勉強を教えてくれて…餅は餅屋で機能した時が一番いい。」<D93>などの発言が見られた。カウンセラー

の立場からの期待や要望があったとしても、まずは教職員の支援の仕方や決定を尊重する姿勢がうかがわれた。また相手の専門性を尊重する発言もみられたため、「相手を尊重する」とした。

李(2012)は連携・協働をうまく機能させるあり方の一つとして、「相手を尊重する態度」を挙げている。また花村(2015)は、チーム支援を円滑に行うために心がけていることの一つとして「他の専門職を知ること、相手を尊敬すること」を挙げており、本研究で抽出された「相手を知る」、「相手を尊重する」との共通点がみられる。

以上のことより、教職員との連携・協働関係を構築する際、多くのカウンセラーが8つのポイントを活用していることが明らかになった。これらのポイントに加えて、「相手を知る」、「組織を知る」、「相手を尊重する」が見出された。これらは特に組織に入る最初の段階で留意すべき重要な点だと考えられる。

吉田(2017)は、チーム医療における「多職種協働を円滑に進めるためのスキル」として、「プライマリーチームのニーズを理解しようとする、患者から得た情報を他職種と共有しようとする、他職種と共通言語をもとうとする」を挙げており、8つのポイントとの共通点がみられる。また前述の通り、花村(2015)も共通する事柄を多数挙げている。これらはチーム医療における心理職のスキルや心得として記述された内容であるが、花村(2015)も言うように「どの分野で働くときにも必要なこと」であり、学生相談カウンセラーにとっても重要なポイントといえよう。

また徳田(2006)では、8つのポイントの一つずつ独立したものとして捉えていた。しかし、今回の研究を通して、それぞれの関連性が見出され、またそのポイントが特に重要になる段階や場面があるのではないかと考えた。さらに、今回見出された3つを加えた11のポイントを、連携・協働の際の「態度」と「スキル」に整理した。つまり、組織に入る最初の段階では「相手を知る」ことや「組織を知る」こと、言い換えれば、臨床のフィールドである組織や連携・協働相手をアセスメントすることが重要になる。その際の態度として問われるのが、「教わる姿勢」や「ニーズの把握」である。組織に入ったうえで、連携・協働関係をスムーズに進めるためのスキルとして、「細やかな報告」を行い、「情報の共有」をすることが重要になる。「情報の共有」が十分になされるためには、「言葉の工夫」が必要であろう。「細やかな報告」と「情報の共有」は重

る部分も多く、連動して起ることがうかがわれた。連携・協働関係を構築する際の態度として、「小さなことからコツコツと」行い、信頼関係をつくっていくこと、独り職場であることが多いため「独りよがりにならない工夫」を心がけることが求められるであろう。「心理の専門家」や「教員」あるいは「職員」としての立場を活かすような関わり方を考えることも連携・協働には役に立つ。また、連携・協働の前提として、「相手を尊重する」態度が重要となるだろう。

今後の課題として、今回の知見をもとに構造化面接を設定して実証研究を行うこと、質問紙調査を用いた量的検討を行うことが挙げられる。

〈付記〉

本稿は日本心理臨床学会第36回大会での発表を加筆・修正・改題したものです。緒方登士雄先生、坂本憲治先生、隅谷理子先生に深謝いたします。

文 献

- 花村温子 (2015). 心理的支援における連携・協働の心得—チーム医療における連携・協働— 臨床心理学15, 727-731.
- 文部科学省 (2013). 大学入学者選抜, 大学教育の現状 pp.3-4, 6-21.
- 文部科学省高等教育局 (2011). 学生支援の現状と課題 大学と学生, 91, 49-53.
- 文部科学省・厚生労働省 (2017年9月19日) 公認心理師法第7条第1号及び第2号に規定する公認心理師となるために必要な科目の確認について <http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000116049.html> (2017年9月20日閲覧)
- 文部省高等教育局・大学における学生生活の充実に関する調査研究会 (2000). 大学における学生生活の充実方策について—学生の立場に立った大学づくりを目指して—.
- 森田達也・野末よし子・井村千鶴 (2012). 地域緩和ケアにおける「顔の見える関係」とは何か? Palliative Care Research, 7 (1), 323-333.
- 中釜洋子・高田治・齋藤憲司 (2008). 心理援助のネットワークづくり—〈関係性〉の心理臨床. 東京大学出版会.
- 日本学生支援機構 (2007). 大学における学生相談体制の充実方策について—「総合的な学生支援」と「専門的な学生支援」の「連携・協働」.
- 日本学生支援機構 (2017). 「大学等における学生支援の取組状況に関する調査 (平成27年度)」集計報告 (単純集計).
- 野坂達志 (2008). コラボレーションによるお作法 臨床心理学, 8, 192-197.
- 李敏子 (2012). 心理的援助における連携・協働のあり方 椋山臨床心理研究, 12, 5-7.
- 齋藤憲司 (2015). 学生相談と連携・協働—教育コミュニティにおける「連動」—, 学苑社.
- 齋藤憲司・道又紀子 (2003). 教職員が関与する相談事例への構えと対処—教育目標と心理的成長をめぐる協働に向けて— 学生相談研究, 24 (1), 12-20.
- 坂本憲治 (2012). 学生相談カウンセラーの職業的発達に関する質的研究—「私の学生相談」を素材として— 学生相談研究, 32 (3), 187-200.
- 下山晴彦 (2017). チーム医療において活躍できる公認心理師教育に向けて 精神療法, 43 (6), 7-9.
- 鈴木英一郎・川島一晃・長屋祐一 (2014). 大学教員による学生対応に対する支援のあり方に関する考察—教員を対象としたアンケート調査から— 学生相談研究, 35 (1), 28-43.
- 高橋美保 (2017). 多職種協働のためのチームワーク論 精神療法, 43 (6), 28-34.
- 高石恭子 (2010). 大学教職員の学生支援・学生対応についての意識の現状—甲南大学における2004年と2009年のアンケート調査から— 甲南大学学生相談室紀要, 17, 15-27.
- 丹治光浩・渡部未沙・藤田美枝子・川瀬正裕・大場義貴・野田正人 (2004). 心理臨床実践における連携のコツ 星和書店.
- 手塚千鶴子 (2004). 連携とプライバシー保護—コミュニケーションの視点より— 慶應義塾大学学生総合センター学生相談室紀要, 34, 31-39.
- 徳田智代 (2006). 常勤カウンセラー配置による教職員との連携・協働関係の形成 学生相談研究, 27 (1), 25-37.
- 徳田智代・牛尾幸世 (2015). 学生相談室と保健管理室との連携・協働による学生支援への効果—新入生定期健康診断の実践を通して— 久留米大学心理学研究, 14, 83-91.
- 鶴光代 (2017). 公認心理師養成カリキュラムの概要 野島一彦 (編) 公認心理師入門—知識と技術— pp.2-5.
- 宇留田麗 (2004). 協働：臨床心理サービスの社会的構成 下山晴彦 (編) 臨床心理学の新しいかたち

- 誠信書房 pp.219-242.
- 吉田沙蘭 (2017). チーム医療における多職種連携のための情報共有 精神療法, 43 (6) 58-63.
- 吉川悟 (2017). チーム医療における公認心理師への期待—システム論の観点から— 精神療法, 43(6), 80-81.
- 吉川悟編 (2009). システム論からみた援助組織の協働—組織のメタ・アセスメント—金剛出版 pp. 9-20.

Strategies for Constructing Coordinated, Collaborative Relationships between Student Counselors and Teaching Staff

TOMOYO TOKUDA (*Department of Psychology, Faculty of Literature, Kurume University*)

Abstract

This study aims to clarify the interpersonal approaches and strategies adopted by student counselors in constructing coordinated, collaborative relationships with teaching staff.

Semi-structured interviews were conducted for fifteen full-time counselors who specialized in dealing with student consultations, and a qualitative content analysis was implemented to the eight categories of interpersonal approach used by counselors, demonstrated by Tokuda (2006) to aid in the construction of coordinated, collaborative relationships. These categories (referred below as the “eight specific points”) are: “stance toward learning,” “understanding of needs,” “information-sharing,” “skillful use of language,” “detailed report,” “to start from a small thing steadily,” “tips for avoiding complacency,” and “making the best use of the present position.”

The findings show that most counselors make active use of the eight specific points in constructing coordinated, collaborative relationships with teaching staff. Furthermore, the points “knowing the other person,” “knowing the organization,” and “respecting the other person” were newly identified, and it appears that these points deserve consideration, particularly at the beginning of one’s involvement with an organization.

Keywords: Student counselor, collaboration, coordination